

淀川沿い レトロな港町「伝法」

写真は日経新聞 16 日夕刊「とことん調査隊」。大阪北西部のベイエリアに位置する此花区。プロスポーツチームの拠点が集まる舞洲、2025 年大阪・関西万博が開かれる夢洲、集客力のあるユニバーサル・スタジオ・ジャパンなどがある華やかな地域だが、淀川に面した北部になぜかレトロな雰囲気の港町がある。その名は「伝法」。歩いてみると、そこには千年以上に及ぶ大阪の臨海部の歴史が詰まっていた。

では、さっそく「伝法港」へ。

伝法港で水揚げされるのは、ウナギやシジミ、スズキなど。なかでも淀川で採れる天然ウナギは味がさっぱりしていておいしいと評判で、大阪・北新地の高級割烹などに納入されている。

伝法港が現在の形になった経緯は、淀川の治水の歴史とも重なる。地域でガイド活動を行う「このはな区民学芸員まち案内の会」の石谷育子代表は「ここは江戸中期まで多くの船が行き交う水運の玄関口だった」と話す。石谷さんによると、伝法川は旧淀川の末流として海に注ぎ、大坂の街に出入りする船や商人でにぎわった。周辺では酒造りも盛んで、江戸まで酒を運ぶ樽廻船も出入りしていた。

さらに時代を遡ると、遣隋使や遣唐使を乗せた船の出発地点だったとされ、此花区の担当者は「当時、航海の無事を祈った神社が今もある」と説明する。その湊標住吉神社の創建は 804 年（延暦 23 年）。遣唐使の安全を祈願してほこらを建てたのが始まりと伝わる。ちなみに伝法の地名の由来にも、仏教伝来の上陸地との説があるという。

伝法川が「玄関口」から退いたのは、17 世紀後半、南側に安治川が開削されたのがきっかけだ。海から街に入る船は伝法川を経由せず、安治川を通るようになった。さらに明治に入ると、1885 年（明治 18 年）の淀川大洪水などを契機に、1910 年まで 10 年以上かけて大規模な淀川改修工事が行われた。直線的に大阪湾に流れ込む新淀川が開削され、伝法川は南から合流する形に。1950 年代に高潮による水害を防ぐため大部分が埋め立てられ、残った約 200 ㍍が現在の伝法港と水路になっている。

水運で栄えた痕跡は今も歩いて確認できる。その一つが「残念石」。大坂夏の陣で焼失した大阪城の再築の際に各地から運ばれ、水没した後に引き上げられた巨石だ。

かつて大阪のウォーターフロントの最前線だった伝法地域。その痕跡をたどる散歩の途中で、この日も何隻かの船が出港していった。歴史は続いている。

(2021 年 11 月 21 日)

